

Tennis House

6
June
2014

fun



Introduction of Stuff
5
Naoto Morioka

苦しみの先に
見える世界がある

コーチングスタッフ

森岡 直人

1994年1月31日生まれ
越谷市出身
早稲田大学教育学部在学中

インターハイベスト16
全日本ジュニアベスト8

天才的なタッチ感覚を武器にオールラウンドにプレーを展開するスタイルで全国の舞台で活躍。体格のハンデを戦術面を磨くことでカバーするなど、生まれ持った頭の良さも光る。

テニスとの出会い

兄がテニススクールに通い始めた事がきっかけで、両親の勧めで僕もテニスを始める事になりました。小学校1年生だったと思います。段々と上達する中で、選手育成のコースに入る事になったんです。それからが本場のテニスとの出会いだったと思います。

辛い選手時代

今だから正直に言うと、選手時代はテニスが好きではありませんでした。僕が育った環境は練習が毎日あって、やる気の無い選手は直ぐにコートから追い出されたりしていて、勝つ事だけを考えて練習していました。練習メニューもきつかったですね。とにかく球を打ってコートに入る繰り返しを延々とやっていた気がします。おまけにとにかく練習が嫌いで、毎日雨が降らないか空を眺めていましたね。テルテル坊主を逆さに作ったりしました。今思い出すと、笑ってしまいますね(笑)

価値観が変わった時

練習中とにかく辛くて、早く終わらないかなんて事を良く考えていましたね。ただ、それだけ辛い練習メニューをこなしましたから、結果が出るようになったんです。試合で勝った時に、初めてテニスを面白いと感じる事が出来ました。勝ててうれしいという気持ちより、今までの辛い練習に耐えてきた事が報われた気がして、それが嬉しいという感じでした。辛い事って沢山あると思うんですが、それに耐える事で見える結果がある事をテニスに教わりました。頑張った自分を褒めてあげましたね。今思えば、厳しい環境に感謝ですね。

選手の指導者として

ジュニア指導の根本には、やはり自分がそうだったように「苦しい事を乗り越える大切さ」というのがありますね。選手としてテニスを続ける事は、ジュニアにとっては相当辛い事です。大人だって辛い事を子供



がするわけですから。指導者としてレッスンをやる中で、これを伝える事がとても難しい事だと感じています。子供でも、色々な思いでテニスをしていますから、頭ごなしにこちらの考えを押し付けてもいけないかったりしますね。それでも選手として上を目指すジュニアには厳しく接するようにしています。意見を尊重しながら、二人三脚での指導を心掛けています。甘やかすだけでは、選手としての成長を邪魔する事を自分が身を以て感じていますから、上を目指す選手たちには、大変な苦しみに耐えて、勝った時の達成感をあじわってほしいんです。本当に考え方が変わると思っています。スポーツって、「苦しい事」を子供のうちから実感できる数少ないものだと思うので、テニスを通じてその過程と結果を楽しんで欲しいです。入り口は楽しいテニスからスタートしますが、段々と勝負の楽しさや、達成感を感じてもらえる事が、指導者として嬉しく感じる事です。

テニス観

残念ながら、僕はテニス選手として体格に恵まれていません。体が大きい事はスポーツには絶対有利だと思います。でもそれを言い訳にすたくなかったです。だから、出来る事は何でもやりました。テニスで一番大事だと思う事は、頭を使う事ですかね。練習中だって、何の為の練習なのか、なぜ必要なのか、とかを考えて



やるだけで全然効果が違うじゃないですか。フィジカルで劣る分、タクティクスとテクニクでカバーすればいいんです。後は、ミスをしたくない事。普段の練習からそれを気を付けていけば、プレッシャーのかかった場面で、必ずそれが活きてきますから。色々勝つために考えましたけど、シンプルにこれに尽きると思いますよ。



Tennis House

fun[®]
テニスハウスファン